

# 「なら」

—全体像の把握のこころみ—

仁 科 明

## 0. 問題の所在と方法

### 0.1. 「なら」の異質性—用法分類のむつかしさ—

本稿は、現代語の順接仮定条件形式の一つとされる「なら」<sup>1)</sup>について、その性格規定を行い、用法の全態を一つの構図の中にしかるべく位置づけることを目指すものである。

先行研究—特に近年のもの—では、「なら」は順接仮定条件形式として一括される「と」「ば」「たら」とは異なるあつかいを受けることが多い。このような処置は、主として次の二つの点によるものであろう。第一は、「なら」の前件述語には他の三形式の場合とは異なって、ル形/タ形の分化が存在するという点である<sup>2)</sup>。第二は、「なら」の後件に命令・意志・推量など「主観性の強い」述語が多いとされる点である<sup>3)</sup>。第二の点から「なら」は主観的である<sup>4)</sup>とか、モダリティあるいは判断のレベルではたらく形式である<sup>5)</sup>とかいう議論がなされることもある。ただし、第二の点については、「ば」や「たら」を用いた「のであれば」形や「のだったら」形などでも「なら」と同様であるから、鈴木(1993a)も指摘するように、この点を過度に強調して「なら」の性格の議論に直結させることは危険であろう。

1) 本稿は「なら」の語で活用語に下接する「なら」だけを指し、名詞に下接する「なら」は議論の対象から外している。「名詞+なら」については、高梨(1995)のように「活用語+なら」と区別しない立場もあるが、前田(1991)が指摘する通り、ほぼ「名詞+である+なら」と同様に考えられるが一部の用法に問題が残るのである。また「なら」には「ならば」などの例を含む。

2) 中島(1990)など。

3) 永野(1975)など。

4) 永野(1975)など。「から」と「ので」の違い(永野(1952))と並行的な現象だ、という把握である。

5) 中島(1990)、益岡(1993)など。また、発話意図の前提・根拠の提示に関わるとする蓮沼(1985)もここに含まれる。

他の形式との比較の観点をはなれても、「なら」には特有のむつかしさがある。前後件で表される事態のあり方や、その関係ということに注目するかぎり、「なら」には、「と」「ば」「たら」に見られるような用法の広がりがないため、他の三形式をあつかう場合とは違った用法分類の観点ないしきっかけが要請されるのである。議論に入る前に、本稿が重要だと考える観点到触れておくことにしよう。

## 0.2. 先行研究における二つの観点

### 0.2.1. 前件述語のテンスの分化とその時間性

前述のとおり、「なら」を他の順接仮定条件形式と区別する性格として、「なら」が下接する述語にル形／タ形の分化が存在するという事実が指摘されてきた。助動詞の「た」（あるいは「たり」）との関係を考えることのできる「たら」は措くとしても、「ば」も「と」も前件の述語は用言の単純な形であって助動詞を分化しないのに対して、「なら」の場合には前件述語にル形／タ形の分化が存在する<sup>6)</sup>。それにともなって、多くの場合には「るなら」形と「たなら」形は意味がちがってくるのであるが、一方で「るなら」形と「たなら」形の意味に違いが感じられなくなる場合も存在し、非常に複雑なあり方を示している。

どのような議論を行うにせよ、「なら」の用法を論じる際には、この事実（前件述語のル形とタ形の分化と、その表す意味）に注意を払う必要がある。また、求められる「なら」理解は前件のル形とタ形の意味上の微妙なふるまいに説明を与えることを可能にするものでもなければならぬ。

### 0.2.2. 「のなら」との置換可能性

一方、先行研究では「のなら」という形との関係から、「なら」に二種類が存在する事実が指摘されてきている<sup>7)</sup>。すなわち「なら」には、「のなら」に置き換えてもほ

6) 以下、本稿では、用言終止形に下接した「なら」を「るなら」形あるいは「るなら」、用言タ形に下接した「なら」を「たなら」形あるいは「たなら」と呼ぶ。

7) 「のなら」に置換できない「なら」への注目は、Inoue (1979) が早いようである。現象への積極的な意味づけとしては、「のだ」の議論の一部としての田野村 (1990) がある。「なら」そのものの考察に利用した議論は鈴木 (1993b) が最初であろう。

8) ここで「大きく意味を変えずに置き換えが可能である」とは、「のなら」で表現される内容を「なら」を用いても表現可能だということである。置き換え可能とする例でも、「なら」の意味のある側面が「のなら」によって強められているといった違いは当然あり得る。

ほとんど意味に差が出ない<sup>8)</sup>タイプと、「のなら」には置き換えることが決して出来ないタイプとが存在するのである。この基準を「なら」の分類に利用する議論は従来から存在してきたが、前者、すなわち「のなら」に置換可能な「なら」が中心的にあつかわれてきた。後者、すなわち「のなら」への置換が不可能な「なら」については、別種のものとして議論から除外する立場さえ存在する<sup>9)</sup>。

「なら」は、古典語における「連体なり」(の未然形に接続助詞「ば」を下接させた「ならば」)に由来するとされる。「連体なり」は準体句的な構造に下接する形式であった。現代語では準体句的な構造がそのままの形で存在することがむつかしくなり、その「底」に「の」をはさむことが多くなっている。その事実を考慮するならば、「のなら」と置き換えができるタイプの「なら」を典型と見る立場もたしかに首肯できる面を持っている。「のなら」への置換の可否が「なら」の性格を考察する際の重要な観点であることは間違いない。

だが、一方で議論の埒外に置かれがちな「のなら」置換不可の「なら」の方にも問題が残っている。従来、「のなら」に置換不可能とされた「なら」は等質的なものとしてあつかわれてきたように思う。しかし、そうした前提は正当であろうか。「のなら」に置き換えられない理由には複数が存在し得るし、少なくともその点について考察をめぐらす必要がある。

あり得べき「なら」の理解は、「のなら」への置換が可能なものと不可能なものの区別はもちろんであるが、そうした区別が生ずる背景にまで説明を与えられるものでなければならないだろう。

### 0.3. 議論の構成

以下、本稿の議論は、次のようにすすめられる。まず、「なら」の用法を「のなら」に置き換えられるタイプと置き換えられないタイプに分けてみていく(第一節)。その上で、本稿の「なら」についての性格規定を考察、提案する(第二節)。さらに、また「のなら」に置き換えられないタイプの「なら」はどのようにして存在するのか、分類された諸類型はいかなる位置関係にあるのか、という問題を考察していく(第三節)。これらの問題に答えることが、本稿の「なら」把握の妥当性の検証ともなるはずである。

9) 鈴木(1993b)。

## 1. 用法の概観

本節では「なら」の用法を概観する。まずは「のなら」への置換の可否によって大きく二つに分け、その上で前件述語のル形／タ形の分化で表現される意味の違いを問題にしていくこととする。「のなら」の置換の可否とはどのような性質の現象なのか、また諸用法の位置関係をどのように考えるべきなのか、といった問題はひとまず置いて、「のなら」に置換可能なタイプの「なら」から見えていこう<sup>10) 11)</sup>。

### 1.1. 「のなら」に置換可能なタイプの「なら」

「のなら」置換可能なタイプの「なら」には、前件述語が「るなら」形であるものと「たなら」形であるものがあり、それぞれ表す時間性（前件事態の実現時点）が異なる。したがって「るなら」形と「たなら」形を分けて考えねばならない。

#### 1.1.1. 「るなら」

##### ①タイプ1 — 「基準時点＝現在」型—

「のなら」置換可の「るなら」には二つのタイプがある。一つ目は以下に挙げる如きである。

- ・彼が相手をするなら、君は勝てないだろう。
- ・ピクニックに行くなら連れていっておくれよ。
- ・君がそれをしてくれるなら、お礼はいくらでもしよう。
- ・辞典があるなら、それを調べなさい。
- ・嘘だと思うなら、彼に聞いてみればいだろう。

これらは、鈴木（1993b）が「絶対テンスのナラ条件文」と呼んだタイプの「るなら」に相当する。挙例によって、「のなら」に置き換えて大きく意味が変わらないということが確かめられよう。このタイプでは、前件の述語の時間性の基準時点が発話の現在に置かれている。よって、このタイプを「基準時点＝現在」型の「るなら」と呼ぶこともできよう。基準時点が発話の現在にあるのだから、前件述語の時間性は主文末

10) 本節での類型化および整理が「なら」にとって本質的だと主張するわけではない。本稿でも最終的には用法の全態を違った形に位置づける。

11) 以下の類型化の基準は鈴木（1993b）も用いているものであり、かなりの部分でその分類と重なる。だが、あつかう範囲の違いから、用法の解釈にも相違が出る。敢えて細かく見ていくのはそのためである。

## 「なら」——全体像の把握のころみ——

のル形の時間性にほぼ一致する。具体例に即して確認しておけば、第一例～第三例では、前件の述語が表す出来事が（発話時）現在から見て未来に確実に起こることとして、第四例・第五例では（発話時）現在に存在することとしてそれぞれ表現（仮定）されている。

なお、ここで「未来」を表すとされる場合、事態の実現・生起の時点は未来なのであるが、その事態は現在確実なものとして仮定されていることにはあらためて注意しておかねばならない。「のだ」文などでも自分の意向や他人の予定や行為への推量が、実現こそしてはいないが現在の現実から確実なこととして（「実情」として）語られることがあるといった事実<sup>12)</sup>をも思いあわせておくべきであろう。

## ②タイプ2—「基準時点＝過去の一時点」型—

「のなら」置換可の「るなら」の二つ目のタイプに属するのは次の如きである。

- ・あいつに校長が務まるなら、俺はとっくに総理大臣だ。
- ・学校へ行くなら、歩いて行っただろう。(バスに乗ったから、別の所へ行ったのだ。)
- ・彼が来るなら、ボクも行ったけれど。(来ないと分かっている行きはしない。)
- ・ああ、学校へ行くなら、バスに乗ったのも納得だ。

鈴木 (1993b) が、「なら」前件の述語の時制の基準時点が主文末にあると見て、「相対テンスのナラ条件文」と呼んだタイプの「るなら」である。このタイプに関しても「のなら」に置き換えて大きく意味が変わることはない。前で見してきたタイプ1の「るなら」においては、仮定された事態の位置づけられる基準の時点が「発話時＝現在」であったが、これらの例においては「発話時＝現在」が基準ではなくなっている点にちがいがあがる。ちょうど、タイプ1の「るなら」の関係を過去のある時点を基準に振り戻したものがタイプ2の「るなら」であると言えることができる。したがって前件の述語の時間性についても、タイプ1の基準時点を過去にずらした形で理解することが可能である。

タイプ1との大きな違いとして、タイプ2では、命令や意志などといった一種の主観性を持った文が後件になることがないという制限が生じていることが挙げられる。この現象に関しては、「モダリティ・レベルへの制限」(タイプ1)と「ことがらレベルへの制限」(タイプ2)との違いに対応すると理解する見方もある<sup>13)</sup>けれど、本稿の見方からは、この事実はむしろ次のように理解されねばならない。

12) 田野村 (1990)・田野村 (1994)。また、本稿の後の議論をも参照。

13) 鈴木 (1993b)。

わざわざ仮定される事態の基準時点を過去へと振り戻した表現であるから、タイプ2の「るなら」が使われる表現には意味的に制限が生ずるのは当然である。あらためて基準時点を過去へと振り戻して仮定を行う表現の可能性は、次の二つにかぎられる。第一は、すでに起こってしまった事実に対して、その時点で別様の事態が存在した場合のことを想定する場合（第一例から第三例）、つまり反事実の仮定の場合である。後件はその状況における事態の推移を語ったり推量したりする表現となり、文の種類としては、平叙文・疑問文となることが普通である。これからの事態への実現の意志を語るような命令文や意志の文が後件となることはあり得ない。第二は、新しく手に入れた知識をもって過去の事態の推移を納得するような場合である（第四例）。この場合にも、動かし難い現実はずでに存在してしまっており、後件に命令文や意志の文がくることは決してないだろう。

このようにして、タイプ2のような表現が可能となるいずれの場合においても、後件の文の種類にはタイプ1には存在しない制限が生じているのである。

### 1.1.2. 「たなら」

#### ①タイプ1—「基準時点=現在」型—

「のなら」置換可の「たなら」にも二つのタイプが考えられる。第一のタイプは次のようなものである。

- ・（くしゃみをしている人に）風邪をひいたなら、この薬を飲みなよ。
- ・あいつにやられたなら、僕が仕返しをしてあげよう。

「るなら」のタイプ1に対応し、鈴木（1993b）で「絶対テンスのナラ条件文」とされたタイプの「たなら」である。発話時点が基準時点として機能している点は「るなら」のタイプ1とひとしく、「基準時点=現在」型の「たなら」と呼ぶこともできる。タイプ1の「るなら」と同様に、前件述語の時間性は、主文末のタ形に準ずると考えてよい。「基準時=発話の現在」から見た過去ないし事態のパーフェクト的な把握であると言える。このように前件の実現時点を考えれば明らかに現在より以前のことであるが、「るなら」のタイプ1でも述べたように、あくまで現在のことが問題にされていると考えるべきであろう。

#### ②タイプ2—「基準時点=過去の一時点」型—

「のなら」置換可の「たなら」の第二のタイプは次のようなものである。

## 「なら」——全体像の把握のこころみ——

- ・一人でアメリカへ行ったなら、英語も覚えられただろう（ツアーでは意味がない）。
  - ・歩いて行ったなら、学校へ行ったのだろう。が、バスに乗ったから病院だ。
  - ・もしも私家が家を建てたなら 小さな家を建てたでしょう…
- （「あなた」小坂明子作詞・作曲）

鈴木（1993b）の「相対テンスのナラ条件文」に対応する「たなら」である。「るなら」のタイプ2に対応して、基準時点が発話の現在ではなく、過去の一時点に振り戻された形で假定が行われ、表現が成立しているタイプのものである。前件事態は、その時点において過去であるか、完了・成立している事態である。

「たなら」タイプ2にも後件の文の種類に制限が存在している。命令文や意志の文が後件となることは無いのである。このような制限が生じる背景には、「るなら」タイプ2に関して述べたのと同じの原理が働いていると考えることができるだろう。

## 1.2. 「のなら」に置換不可能なタイプの「なら」

### 1.2.1. 「るなら」と「たなら」が置換可能なタイプ

次に挙げる用例のような「なら」は、決して「のなら」に置き換えることができない。もちろん、「のなら」に置き換えた文も文としては可能であるが、意味が大きく変わってしまい、用法類型としても別のものに入れられることになるのである。

- ・物価が上がるならば、景気は下向く。
  - ・この坂を越えたなら しあわせが待っている  
（「夫婦坂」星野哲郎作詞／市川昭介作曲）
  - ・この機会を逃すならば、もう死ぬまでハレー彗星は見られない。
  - ・事情を知らない人の眼から見るなら、さぞ奇異な感じがするだろう。
  - ・彼らの惨状と比較するならば、我々はまだ恵まれているほうだ。
- （以上三例は田野村（1990）の挙例）

このタイプの「なら」は次の諸点によって「のなら」に置き換え可能な「なら」とは明確に区別される。第一に、後件が命令文や意志の文になることがないという点である。これは、タイプ2としてきたものとは共通であるが、背景の論理が異なるものと考えねばならない。第二に、前件の述語を「たなら」形にしても「るなら」形にしても対象的（時間的）な意味にはほとんど違いが生じないという点である。この種の「たなら」形での述語のタ形は、時間的な意味に関わるというよりは達成への願望や、

あるいはそれと表裏の関係にある事態そのものの達成しがたさを表しているに過ぎないとも見られるのである<sup>14)</sup>。第三に、使われる文脈が限定されてきており、現代ではほとんど日常語として使われることがなくなっているという点である。このタイプの「るなら」形に関して論理学の教科書風だという指摘<sup>15)</sup>があるが、「たなら」形も歌謡曲や明らかに文語脈の文章などきわめて限定された文脈でしか見ることができないのである。

### 1.2.2. 「るなら」に置換不可能な「たなら」

従来、区別されることはほとんどなかったようであるが、「のなら」に置換不可能なタイプの「なら」には、前項で示したもの以外に、もう一類が存在している。次に挙げる例のような「たなら」である。

- ・ ジョニイが来たなら 伝えてよ 二時間まってたと  
（「ジョニイへの伝言」阿久悠作詞／都倉俊一作曲）
- ・ 道に迷ったなら、誰かに尋ねなさい。（田野村（1990）の挙例）

このタイプでも「なら」を「のなら」に置換することはできない。このタイプの用法で仮定されている事態は、実現時点から言えば純粹に未来に属するものであるが、「のなら」に置き換えた場合には、前件事態が現在までの現実属することのようになってしまい、「たなら」のタイプ1としての読みしか考えられなくなるのである。

このタイプの「たなら」の用法には、前項の「たなら」とは異なる点が大きく二つ存在する。第一は、前項の「たなら」が「るなら」に置き換えても大きく意味が変わらなかったのに対して、ここに挙げた「たなら」については「るなら」に置換することが不可能である点である。「るなら」形にすることは不可能ではないが意味が大きく変わってしまうのである。第二は、前項の「たなら」の後件は判断文が普通であり、平叙文、疑問文が普通だったのに対して、このタイプの「たなら」の後件には命令文や意志の文であるという点である。この点では、むしろ「のなら」に置換可能なものに近いと言えるであろう。

この類の「たなら」は、タイプ1とした「たなら」の基準時点を「発話時＝現在」から未来の一時点に移動したものだとも考えられるわけである。この類に「るなら」

14) このニュアンスには、タ形の表す「完了」の一面としての「達成」という側面が関わっていると思われるが、理由ははっきりしない。

15) Inoue (1979)。



## 「なら」——全体像の把握のころみ——

がないのは、未来の時点において確実な未来を考えることは、表現上ほとんど意味がないためであると解釈される。

なお、このタイプの表現では「たなら」形ではなく、「たら」形を使うのがむしろ普通である<sup>16)</sup>。こうした「たなら」の例はあり得ないとして、容認しない感覚を持つ論者も存在するかも知れない。筆者もこうした例が、日常用いられる文としてまったく普通のものだとは考えない。しかしながら、「たら」よりも「たなら」が好んで用いられる傾向のある歌謡曲の歌詞などにはしばしば見られるものであって不自然ながらも使えないわけではないこと、また、「たら」とはニュアンスの違いをもって使われているらしいことを重視するのである。

## 2. 「なら」の働きと意味

前節で概観してきた「なら」の用法の広がりをもっとくく上げるためには、「なら」に対してどのような規定を与えることが必要であろうか。前述のとおり、「なら」が「連体なり」に由来するものであることは、歴史的な面からも認められているところである。そのこととも関連するが、本稿は「なら」の性格について次のような規定を提案する。すなわち、「なら」を「内容としてまとめあげられた（前件）事態が「存在」することを仮定する」<sup>17) 18)</sup>形式だと考えるのである。

ただし、この規定の理解のためには次の二点への説明が必要だろう。第一は、この規定中の「存在」という語についてである。ここでの「存在」はかなり広義であり、基準時点に実在しているわけではないが、それ以前に存在したことが知られている過去の出来事や、存在することが確実な未来の出来事のあり方までをもふくむものとして考えられている。第二は、「なら」の「仮定」の性格についてである。「なら」の

16) さらに踏み込んで「たなら」は「たら」にすべて置き換えられるとする網浜（1990）のような判断もある。

17) この規定は、「なら」の性格を「（現在の）判断の仮定」とする山口（1969）の規定を「判断」の側からではなく、「事態（内容）」の側から述べたような関係にある。

18) 「なら」の異質性を強調する議論では、前件と後件の実現時点が「と」「ば」「たら」の場合とは逆になる点がしばしば強調される。本稿の立場からは「なら」においても前件事態が「存在」する時点は後件よりも前だと考えたい。ヤコブセン（1990）は、順接仮定の諸形式における前-後件の関連性の代表として「前後性」を考え、「なら」の場合には「前提性」という意味でやはり前件が先行すると述べている。本稿も、前-後件の関係として前後性を認める点では同じ立場に立つ。更に進んで「存在」を本稿のように考えた場合には、前-後件の関係を「前提性」のようなものでなく「時間的な先後」としてとらえられると考える。

19) 「ば」や「と」の「仮定」用法の理解は川端（1958）、阪倉（1958）及び鈴木（1986）などを参照のこと。

「仮定」は端的にある事態存在(＝場面)を思い描くものである。すなわち、「なら」の「仮定」は、「恒常的關係」を表す用法からの拡張ないし延長ととらえられる「と」や「ば」の「仮定」とは異質なのである<sup>19)</sup>。この二点の補足によってあり得る誤解も避けられようかと思う。

ここに提案した規定の妥当性を検討するために考えるべき問題は二つである。第一は、この規定によって「のなら」の置換の可否が説明できるかということであり、第二は、この規定によって第一節で概観してきた「なら」の用法の広がり が十全に位置づけられるかということである。次節で順を追って検討していこう。

### 3. 用法の位置づけ——「のなら」置換の可否の本質への考察を兼ねて——

#### 3.1. 「のなら」の置換の可否の問題

##### 3.1.0. 「のだ」文の働きと「のなら」

「なら」と「のなら」との置換の可否を問題にするためには、まず本稿の「のなら」、そして「のだ」への理解を示しておかねばならない。本稿では、「のだ」の働きを田野村(1990)などにおける田野村忠温氏の把握にならって、次のように理解する。すなわち、「のだ」はことがらや状況の背後に存在する事情・実情を表すと考えるのである<sup>20)</sup>。その場合、被説明項となる現実がことばの上に表される場合も表されぬ場合もある(次の挙例を参照)。

- ・彼が腹を抱えているのはおかしくて笑っているのだ。
- ・実は、悩みが有るんです。
- ・あした彼にあって来ようかと思うんだ。

「のだ」の性格、特に「実情」ということについては注釈が必要かもしれない。「のだ」文の表現する「実情」とは、基準時点において目に見える状況の背後に存在

20) 「のだ」に関する議論は岡部(1995)も指摘しているように大きく二つの方向に分けられ、ここで採るような立場(田野村(1990)・田野村(1994))以外に、「のだ」が上接句を準体句的にまとめ挙げることしかしていないとする立場(吉田(1988)・吉田(1991))がある。後者のような理解も、特に「の」によってまとめられた句の理解としては妥当な面を持つと思われるが、述格に用いられて「のだ」形になった場合にはそこにとどまらない積極的な色合いを持っている(用法の広がりとしては逆に限定されている)ようである。また、「なら」を問題にする限りは後者によらねばならないような用法は現れないこともあり、ここでは前者の理解を採る。

## 「なら」——全体像の把握のころみ——

が確実視できるものに限られるのであり、また基準時点も現在あるいは過去の一時点に限られるという点である。ここでいう「実情」には、目に見えぬ聞き手や第三者の意志・意向や予定などが含まれるから、未来のことが表現されることもあるが、そのような場合でも、あくまで現在（あるいは基準時点たる過去の一時点）の状況と強く結びついているのである。

「のなら」もここに見たような「のだ」文の理解からすると、基準時点（現在あるいは過去の一時点）における「実情」を仮定する形式だと把握することができる<sup>21)</sup>。

### 3.1.1. 「のなら」への置換が不可能になる理由

第二節において「なら」の性格を規定し、前項では「のだ」文と「のなら」の関係について考えてきた。このような準備の上で、「なら」の中に「のなら」への置き換えが可能なタイプと不可能なタイプとが存在する理由を示していくことにしたい。

前項で強調しておいたところによれば、「のだ」文一般の働きにおいて重要な部分は次の二点であった。「のだ」文は「実情」を表すものだという事、そして、その「実情」は、現在あるいは過去の特定の時点の状況と結びついたものであるということである。「のなら」に置き換えられないタイプの「なら」においては、何らかに「のだ」文のこうした性格と相容れない部分が存しているのだと考えられる。

「のなら」に置換することのできない「なら」の第一のものには、「るなら」と「たなら」の対立が曖昧であるという特徴があった。このタイプにおいて「のなら」置換が不可能になるのは、このタイプの「なら」を用いた表現は、単なる仮定にとどまっておき、現実への実現・生起を考慮しないものであるためだと考えることができる。事態のあつかいとしてみれば個別の事態を仮定しているのであるが、表現全体としては一般論的な色彩がつよい。現実への実現・生起を考慮しない表現であるという性格が、「のなら」への置き換えを妨げているのである。現実への生起を問題にしない表現である以上、（現在あるいは過去の一時点の）現実の「実情」として事態を述べようとする「のだ」文のあり方とははっきりと矛盾してしまい、「実情」を仮定す

21) 「のなら」を「のだ」述語の「なら」形ないし仮定形ととらえる理解には、注1に記した「名詞+なら」形の問題を除いても、丁寧形をめぐる難点が存在する。文末の「のだ」には丁寧形「です」「ます」が上接することがないのに対して、「のなら」には（多少不自然ではあるが）「ますのなら」「ですのなら」形があり得るのである。同様のことは「から」や「ので」などでも起こる（「ますから」「ますので」）。この問題については、文末では「のです」を用いて丁寧が表現できるために「のだ」に丁寧形を上接する形の発達がブロックされているのだと考えておきたい。

る形式である「のなら」には置き換えられなくなる。つまり、「のなら」置換不可の第一のタイプは、「現実」とか「実情」といった側面の欠落によって、「のなら」への置換が不可能になっているのである。

一方、「のなら」に置換することのできない「なら」の第二のタイプについては、「のなら」に置換が可能なものとの共通の性格を見て取ることもできた。仮定の基準となる時点が発話の現在や過去でなく、未来の一点に置かれたものだと解釈されるのである。上述のように、「のだ」文は現在あるいは過去の一時点における現実の背後にある「実情」を表すものである。「のなら」置換可能なタイプと共通の性格を持っているとは言え、基準時点が未来に置かれていることによって、このタイプは「のだ」で表すことができないのだと考えられる。すなわち、この第二のタイプでは、「のだ」文の要件の内、「現実あるいは過去の時点と結びついている」という部分ないし側面の欠落によって「のなら」への置き換えができなくなっているのである。

以上、「のなら」への置き換えができない「なら」の二種は、それぞれが「のだ」文（そして「のなら」形）の持つ性格と離反する面を持ち、そのことによって「のなら」への置換が妨げられており、その離反は各々の事情で起こっていることが分かった。この二タイプは、「なら」の諸用法の布置においても異なる部分に位置づけられねばならない。

### 3.2.用法の位置関係——「基準時の実情仮定」型と「一般論的仮定」型——

用法の位置関係への理解については、「のなら」への置換の可否をめぐる議論の中で、一部論点を先取りして述べてきているが、あらためて整理してみることにしよう。

「のなら」との置換の可否の問題の背景を考えると、第一節で行ったような「なら」の用法の整理は、それ自身は妥当なものであるにせよ、用法の布置を考える上では不十分だったことが分かる。「のなら」への置換の可否は、幾つかの要因の複合によって生ずる現象であり、その基準では「なら」に関する重要な区別を行うことができないのである。

第二節において、「なら」の性格について「内容としてまとめあげられた（前件）事態が「存在」することを仮定する」形式であるという規定を提案した。注記しておいたように、ここでの「存在」はかなり広義のものである。「なら」の用法はここから、「存在」の意味（＝「存在」のしかた）によって、二つの方向に分化することに

なる。

第一の方向は、ある時点の現実に対する「実情」としての「存在」を仮定するというものである。こうした意味での「存在」は、その時点に現実として存在する必要はかならずしもない。その時点において確かなこととしてある過去のことや、実現することが確実な未来のことであっても構わないのである。基準となる時点は、現在・過去・未来のどこに置くこともできる。その内、「のなら」に置き換えることが可能であるのは、基準時点を現在や過去の一時点においた場合だけである。

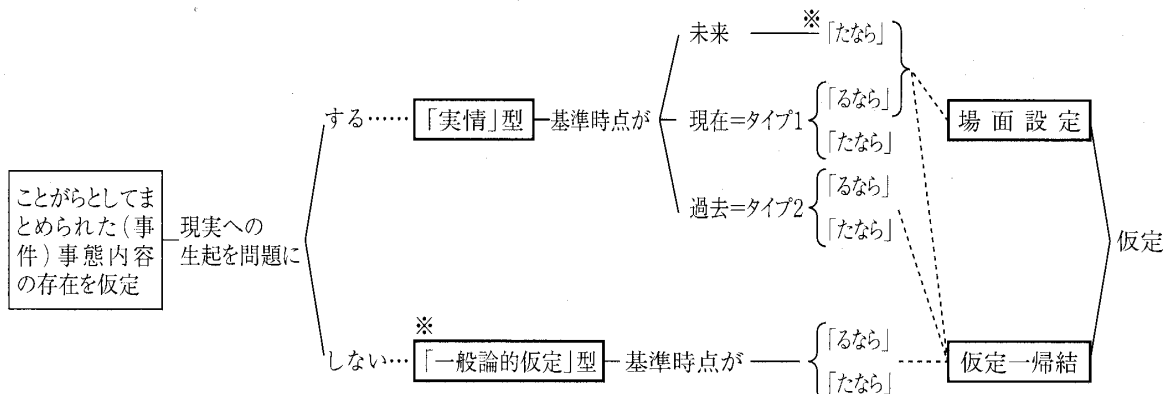
第二の方向は、ある時点の現実とははなれた形での（一般論としての）「存在」を仮定するものである。この方向では、現実への実現・生起は考慮されないため、基準時点も意識にはのぼらず、前件に「ル形／タ形」の対立は存在するものの、ニュアンスの差を生ずるだけで時間的な意味に違いを生じない。個別の事態の存在をかならずしも考慮しない（事態の現実存在を志向しない）点で、第一の方向とは区別されることになる。

この二つの方向の区別は、「なら」が古典語の「連体なり」に由来するものであり、上接句をことごとく内容専一にまとめあげるといふ働きをも有していたことと無関係ではなかろう。準体句としてまとめあげた事態内容を現実への説明（＝「実情」）として適用していくか、現実にかかるか否かということは度外視して単なることごとく内容としてとどめておくか、という準体句の用い方の二方向に対応していると考えられる。このうち、前者の方向の用法の一部が「のなら」と重なり合うことになるのである。

#### 4. まとめ——「なら」の全体像——

本稿では、「なら」の用法を「のなら」への置き換えの可否という観点を用いて概観した上で、「なら」という形式の性格を「内容としてまとめあげられた（前件）事態が「存在」することを仮定する」ものであるととらえた。そうした把握の妥当性の検証の意味も込めて、本稿の「なら」把握によって「のなら」への置き換えの可否の問題に説明をつけることが可能であること、いくつかに分けられた「なら」の用法が一つの構図の内に収まることを確認してきた。最後にあらためて「なら」の用法の位置関係に関する本稿の議論を簡単にまとめておけば、次の図のようになる<sup>22)</sup>。

## ● 「なら」の全態 (図中※印は、「のなら」置換不可能の「なら」)



## 参考文献

- 網浜信乃(1990) 条件節と理由節——ナラとカラとの対比を中心に——(待兼山論叢日本学篇24 1990.12)
- Inoue, Kazuko (1979) On conditional connectives (科研費研究報告書『日本語の基本構造に関する理論的・実証的研究』1979)
- 岡部嘉幸(1995) 「のですか」質問文の表現性——体言化の機能という観点からの分類の試み——(『築島裕先生古稀記念 国語学論集』汲古書院1995.10)
- 川端善明(1958) 接続と修飾——連用についての序説——(国語国文27-5 1958.5)
- 阪倉篤義(1958) 条件表現の変遷(国語学33集1958.6→『文章と表現』角川書店1975.6)
- 渋谷倫子(1996) もう一つの現実を表す「の」(日本語教育91 1996.12)
- 鈴木義和(1986) 接続助詞「と」の用法と意味(国文論叢13 1986.3)
- 鈴木義和(1993a) ナラ条件文の用法——聞き手との関係を中心に——(園田語文7 1993.3)
- 鈴木義和(1993b) ナラ条件文の意味(『日本語の条件表現』くろしお出版1993.5)
- 高梨信乃(1995) 非節的なXナラについて(『複文の研究(上)』くろしお出版1995.5)
- 田野村忠温(1990) 『現代日本語の文法I 「のだ」の意味と用法』(和泉書院1990.1)
- 田野村忠温(1994) 「のだ」の機能(日本語学12-11 1993.10)
- 中島信夫(1990) 日本語の条件文「…ナラ…」について(甲南大学紀要文学編73 1990.3)
- 永野 賢(1952) 「から」と「ので」とはどう違うか(国語と国文学29-2 1952.2)
- 永野 賢(1975) 「もしも私が家を建てれば…」の文法——条件表現「ば」「と」「たら」「なら」——(『新・日本文法講座2』汐文社1975.3)
- 蓮沼昭子(1985) 「ナラ」と「トスレバ」(日本語教育56 1985.7)
- 前田直子(1991) 条件文分類の一考察(東京外国語大学日本語学科年報13 1991.10)
- 前田直子(1995) バ、ト、タラ、ナラ——仮定条件を表す形式——(『日本語類義表現の文法(下)』くろしお出版1995.10)
- 益岡隆志(1993) 条件文と文の概念レベル(『日本語の条件表現』くろしお出版1993.5→益岡(1997)第二部第三章)
- 益岡隆志(1997) 『複文』(くろしお出版1997.5)

22) 図の右側に別観点からの分類との対応も示してある。「仮定-帰結」とは前-後件の恒常的關係に基づくものとしても理解可能なタイプの順接仮定表現を指し、「場面設定」とはそうした理解が不可能なタイプの順接仮定表現を指す。

## 「なら」——全体像の把握のこころみ——

- ヤコブセン,W.M(1990) 条件文における「関連性」について(日本語学9-4 1990.4)
- 山口堯二(1969) 現代語の仮定条件法——「ば」「と」「たら」「なら」について——(月刊文法2-2 1969.12)
- 吉田茂晃(1988) ノダ形式の構造と表現効果(国文論叢15 1988.3)
- 吉田茂晃(1991) [書評] 田野村忠温著『現代日本語の文法I——「のだ」意味と用法——』(国語学164 1991.3)

歌謡曲の歌詞の探索と挙例は次に依った。

古茂田信男・島田芳文・矢沢寛・横沢千秋(編)『新版 日本流行歌史上・中・下』(社会思想社 1994.9, 1995.1, 1995.5)

堀野真一(編)『ポケット版 昭和歌謡大全集』(成美堂出版1995.4)

**附記**

本稿は、1995年12月に東京大学大学院人文社会系研究科に提出した修士論文(未公刊)の一角を改めたものである。修士論文作成の際に重要な御助言をいただいた尾上圭介先生、山口明穂先生に感謝申し上げる。